

第6回国際植物保護会議に出席して

農林省農業技術研究所 岩 田 吉 人

去る8月30日から9月6日までオーストリアのウィーン市で第6回国際植物保護会議 (VIth International Congress of Plant Protection) が開催され、幸い出席する機会を得たので、ここに会議の状況を簡単に紹介することにします。

この会議は IUPAC (The International Union of Pure and Applied Chemistry) の Pesticides Section の Sponsorship のもとに、ウィーンにあるオーストリア植物保護研究所の所長 BERAN 博士を長とする Congress Committee により組織されたものである。

この会議の第1回は1946年ベルギー(ルーバン)、第2回は1949年イギリス(ロンドン)、第3回は1951年フランス(パリ)、第4回は1957年ドイツ(ハンブルグ)、第5回は1963年イギリス(ロンドン)で開かれたが、会議と会議との間隔も一定でなく、会議の名称も異なっている。すなわち、Plant Protection になったり、Crop Protection になったりしており、とくに前回のロンドンでの会議は International Pesticides Congress となっていて、内容も化学的防除の基礎問題に限定されていた。

今回の第6回の会議については、オーストリアの組織委員会が各国の仲間と十分に相談して、植物病理や昆虫の一般の問題は除くが、また化学的防除だけに限定することを避け、中道を歩むことにしたという。初回以来、この会議の特徴である農業についての重要性を再確認しながらも、植物保護において総合的防除の推進が必須的なものであるという考えである。

植物保護においては病害、害虫、雑草などについて、これらを防除するための各種の方法を全体として取り扱うことが必要で、化学的防除は生物的防除および栽培的方法との関連において行なわれるべきものだと考えに基づいている。化学的防除はその経済的重要性にもかかわらず、それだけでは存在し得ないもので、生物的防除、栽培的方法を組み合わせて初めて大きい成果を期待できるとしている。このことから、今回の会議の期待しているところが何であるかが、ほぼうかがい知ることができよう。

開会式は8月30日午前10時からウィーン市のコンツェルトハウスで開かれたが、お国柄だけあって式はファンファーレで始まり国歌演奏がある。前記 BERAN 博士の司会のもとに式が進められ、関係知名人に続いて大統領 Dr. FRANZ JONAS の観迎の挨拶があった。その後で有名な SCHRADER 博士の“重要なリン殺虫剤の合成と性質”という講演が博士の弟子の SCHMIDT 博士によって行なわれた。

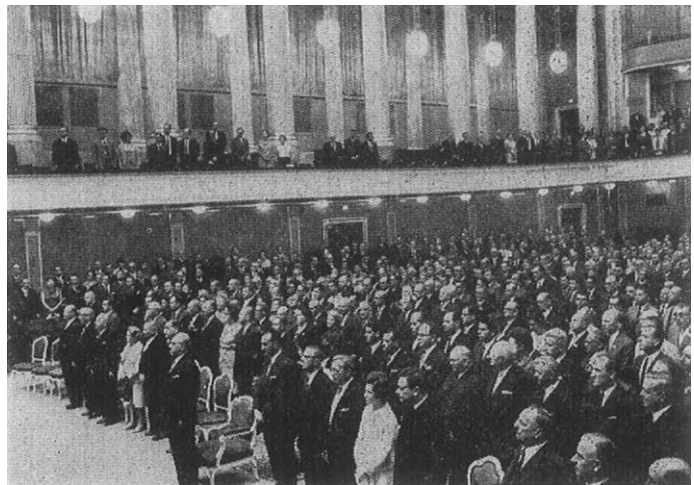
午後からはさっそく会場のウィーン大学でシンポジウムや一般講演が各会場に分れて行なわれた。この会議のシンポジウムおよび一般講演は次のようである。

Symposia

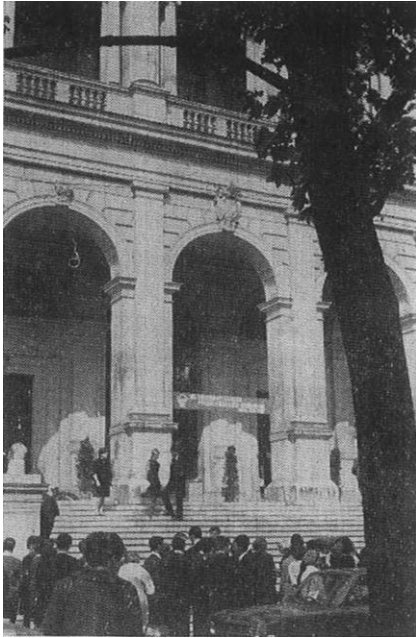
- A1 ガスクロマトグラフィー
- A2 薄層およびペーパークロマトグラフィー
- A3 薬剤抵抗性

Sections

- B1 生物的防除および栽培的方法 (53)
- B2 物理的および機械的防除 (10)
- B3 化学的防除
 - (1) 殺虫剤、殺ダニ剤、殺線虫剤、殺そ剤 (77)
 - (2) 殺菌剤 (29)
 - (3) 除草剤 (43)
 - (4) その他(抗生物質、発芽阻害剤など) (20)
- B4 農薬および農薬残留研究のための分析法 (26)



第1図 コンツェルトハウスにおける開会式
(前列中央はオーストリア大統領)



第2図 会議の会場であるウィーン大学正面入口

B5 農薬残留およびその他農薬の好ましくない影響 (38)

B6 総合的防除 (32)

カッコ内の数字は講演題目数であるが、B3(1)すなわち、殺虫剤などに関するものが最も多く、また、生物的防除および栽培的方法、除草剤などの関係のものが多いのが目につく。農薬残留に関する Section の題目数も多いが、殺菌剤関係は少ない。

Sections の講演発表国は 31 カ国で、講演題目総数は 330 であるが、そのうちイギリス、西ドイツ、フランス、オランダ、ベルギー、スイス、スペイン、イタリアなど西欧諸国がほぼ半数を占め、地理的に参加しやすいということもあろうが、この会議がヨーロッパで生れ、ヨーロッパで育った会議だという感を深くした。また、東ドイツ、ユーゴ、ルーマニア、ハンガリー、チェコ、ポーランド、ブルガリアなど東欧諸国からの講演発表が 70 あり、ソ連は 14、アメリカからは 45 の発表があった。

日本人ではシンポジウムに内山 充氏 (ガスクロによる有機リン殺虫剤代謝物の測定)、富沢長次郎氏 (ハスモンヨトウの薬剤抵抗性と防除法) が参加し、一般講演には福永一夫氏 (ダイアジノンの *in vitro* の代謝)、高橋信孝氏 (新しい天然殺虫剤 Piericidins)、酒井清六氏 (マツの穿孔虫防除におけるリンデン EDB 混合剤の効果)、野村健一氏 (球根ダニに対する粒状浸透殺虫剤の効果と肥料の影響)、宗像 桂氏 (天然産害虫防除剤

isoboldine と cocculolidine) らが発表した。

シンポジウム、一般講演は 7 会場にわかれて行なわれたが、講演発表は英、独、仏語のいずれかということになっている。ところが、一般講演発表 330 題のうち、発表国語が英語は 134、ドイツ語 144、フランス語 52 で、ドイツ語が英語よりむしろ多い。これは西ドイツからの発表が 63 でほぼ半数を占めていることや、開催地がウィーンであったためもある。通訳も特別に行なわれないので、私のような者はドイツ語やフランス語の講演、とくに討論のときは閉口した。英、独、仏語それぞれ 20 行前後の短い要旨をのせた abstract 集があるので、もっぱらそれに頼らざるを得ないという状況であった。

最後の日の9月6日には“植物健康の日”(Plant health day) の記念講演会が大学の講堂で開かれた。これは植物保護協会 (Arbeitsgemeinschaft für Pflanzenschutz) がドイツ植物医学会 (Vereinigung deutscher Pflanzenärzte) と共催で開いたものである。そして BRAUN 博士 (西ドイツ) の“国民生活における植物病害の役割、その過去と展望”、MÜLLER 博士 (東ドイツ) の“植物医学と植物保護”、STOLZE 博士 (西ドイツ) の“ドイツ植物医学会の目標”、SCHMUTTERER 博士 (西ドイツ) の“最近の植物保護における応用昆虫学の役割”、GREWE 博士 (西ドイツ) の“植物薬学の科学としての本質、発展、影響”などの講演が行なわれた。

この会議における一般講演総数、講演発表国などは前述したとおりであるが、会議参加者の総数は 1,100 名を越え、参加国数は私の調べたところでは 46 カ国であった。すなわち欧州諸国、ソ連、アメリカのほか、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、中東 (イスラエル、レバノン、トルコ、イランなど)、アフリカ (アラブ連合、チュニジア、ナイゼリア、ザンビア、ケニアなど)、南米 (ペルー、ベネジエラ、コロンビア、ブラジルなど)、インド、セイロン、タイ、フィリピン、日本などから参加があり、正に国際会議の規模をもっている。日本は在外中の者を含め 15 名参加した。

会議の内容の詳細については紙数の都合で割愛するが、この会議は上記のようにガスクロマト、薄層、ペーパークロマトのような特定の専門技術に関するシンポジウムがある反面、植物保護に関する広い分野にわたって発表、討論が行なわれ、各国の植物保護研究における特質、水準などをうかがい知ることができた点においてきわめて有益であった。とかく視野の狭くなりがちなのが国の研究者が今後も引き続きこの会議に参加し、各国の植物保護研究について知るとともに、わが国の研究成果を発表することは有意義であると考えられた。